

# 2017年度GTセミナー 第45回保育環境セミナー前編 2017.9.4～9.6

第29号 2017年9月18日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や  
ご要望に応えるコンシェルジュがいる  
ように、保育においても様々な  
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=  
ミマモルジュとして、保育に関する  
ご要望にお応えしていけるよう  
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

## 第45回保育環境セミナー開催

先日、第45回保育環境セミナーが東京の竹橋で開催し、  
全国から77園、計130名を超える先生方にご参加頂きました。

プログラムは、保育環境研究所ギビングツリー代表の藤森先生の  
基調講演、見学園紹介、懇親会、実践園報告、見守る保育の5つの  
ポイント、ミマモリングソフトの説明、ドイツ報告、Q&A、  
園見学が3日間に渡り行われました。

藤森代表の基調講演「見守る保育の環境と創造」では、世田谷区から  
発行されている『なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい  
～世田谷区の保育の質ガイドライン』を用いながら行われました。

世田谷区から発行されているガイドラインは保護者向けにマンガと文章  
で内容がまとめられています。ガイドラインは世田谷区のHPから、  
ダウンロード可能です。

[なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～世田谷区の保育の質ガイドライン](#)  
発行 世田谷区 子ども・若者部保育課

## ●過去のセミナー報告のご案内

第44回保育環境セミナー：本誌、第20～21号

GTサミット2017：本誌、第26号

ドイツ×日本「保育研修」：本誌、第28号



セミナー会場の様子



世田谷区で保護者に  
配布されている冊子

## セミナーを終えて思うこと

世田谷区が発行している冊子には1~14のストーリー仕立てで、保護者が保育園を見学する様子が描かれています。

保育園ってどんなところ？幼稚園とどう違うの？

きっと、こんな素朴な疑問を抱き、我が子をどこへ預けようか、まずは見学へ行ってみよう！と一歩を踏み出すのだと感じます。

前回の研修（第44回保育環境セミナー）でも、藤森先生はこの冊子について内容を触れられていましたが、今回はさらにより細かく内容を見ていかれました。

これまで見守る保育をどう考え、どう実践していくか。藤森先生の講演や各園の実践事例を通して保育の理解を私自身してきました。

この冊子が画期的だと思うのは、保育者目線ではなく保護者目線で、どういう保育が質が高いかということを描いているところです。それは、同時に保育者がどう保護者へ説明していけばいいかを書き表していることでもあり、保育者の専門性が発揮されるところでもあるのだと感じました。

マンガだからと侮るなかれ、一読の価値あり！そんなことを思います。

子どもたち一人ひとりの成長のストーリーを皆で見守っていく、それが保育園や幼稚園なのかなと改めて感じました。

ぜひ、世田谷区の冊子にも手を取って頂ければと思います。

未来へ続く1ページとなることを願って。次号に続く。

（報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢）

### ●過去のバックナンバー

#### 第26号

GTサミット2017

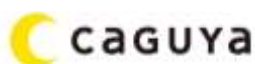
#### 第27号

築120年古民家『聴福庵』⑥

#### 第28号

ドイツ×日本「保育研修」

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>



〒161-0023

東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、  
QRコードからお願いします。

—はじめに—

皆さん、こんにちは。今日、午前中見学された皆さんお疲れ様でした。どういう風に見られたかと思うが、雨が降っていて、いつもは散歩へ行くが行けなかったため騒がしかった。全体的に私たちは今回改訂される保育所保育指針、幼稚園教育要領、認定こども園・保育教育要領に沿って保育をして根拠としている。それを丁寧に読み込み現場でどんな形か行っている。どんな保育かと聞かれたら指針に則っている。誤解されているのが自由で、のびのびしているのがいいが、躰はできていないのではないかと。学校へ行ったら、座ってられないのではないと言われることがある。見学でお集りを見てもらえなかったし、月曜日ということもあるが私の園の歯科指導の先生から言われたのが、「せいがの子どもたちは元気でいいですね。私たちが一言でも話そうとしたら静かになるのは新宿区で初めて」と言われた。

自由な保育だと、それはいいけど学校へ行ったら困るという印象があるが、私は逆だと思っている。子どもたちが好きなことを自由にしていると、子どもたちは人の話も聞けるようになる。先生が注意して言っているほど、学校へ行くといひどくなると思っている。ある養成校の先生が来て学生に自由保育の園として紹介したいと言われてきた。自由保育はこうだと紹介していいかと聞かれ、いいと答えにくかった。「自由保育かな？」と思った。その人がどう思っているかということもあるが、正確には自由保育だがそう取られていない。朝の連ドラで私の自由と考えている行動をしていた。主人公が東京に働きに出て、好きな人と別れ親のために働き健気に働いている。「もっと自由に生きなきゃだめだよ。女だってもっと自由に生きるべきだ」とある人が言ったら、「主人公が自由とは何ですか？」と言った。自分のままにということとは自分の選択した生き方をすること。「私は自分が選択した生き方をしているから自由だ」と主人公が言っていた。うちの園は子どもが選択をして遊んでいるから自由。自由というのはそういうものがないもの。規制がないものと思っ

ているので使うことをためらう。日本はとても難しい。民主主義ということをやヨーロッパでは教えようとしている。私が教員で1年生を教えていた時があり、校長が話をしていたら子どもたちがおしゃべりをしていて。「ちゃんと校長の話聞きなさい」と注意したら、隣の先生が「校長の話がつまらないから仕方がない」と言っていた。「だったら、文句を言いに行かないとでしょう」と言ったら、その先生から「藤森先生はずいぶん軍国主義なのね」と言われた。きちんとするということが軍国主義で、ぐちゃぐちゃすることがその先生は民主主義だと思っている。子どもでも校長のところへ行っ行って言いに行くのが民主主義だと思っている。言いに行くためにはちゃんと聞いていないと言えない。ただし軍国主義というのは校長の話聞いて、ちゃんと聞きなさいと言うことで、つまらないのに黙って聞きなさいとは言っていない。見守るということをどう感じるかわからないが誤解を招くことがある。見守ると言う手を出してはいけない、口を出してはいけないと思っている方がいる。うちの園で給食になると黄燐を鳴らす。「子どもに給食の時間だよと、言っているのでしょうか？」と質問された時にこういうことを言った。電車に乗っていたある人が新宿で降りるのを知っていた。でも、本を読んでいて気付かなかった。その時に「もしもし。新宿ですよ」と言ってあげる。新宿で降りるかどうかは本人が決める。「給食の時間だよ、行きなさい」ではなく、行くかどうかは子どもが決める。そこが微妙。行くかどうかは本人が決める。「時間だよ」と言うのは気づかないから言ってあげる。もう一つ、見守る保育の研修会があったそう。

これは私たちとは違う会で広島大学の先生が見守る保育を研究している。昨年、見守る保育と言うことでアメリカで映像を見せた。子どもたちが喧嘩をはじめ先生たちが見守っていたと言っていた。2時間も喧嘩をして何となく子どもたちの喧嘩が終わる。「先生に何でずっと見守っていたんですか？」と聞いたら、「きっと解決するから」と言っていた。アメリカの保育者はこれを観て「おかしい、もっと早く口をだすべきだ」と言っていた。以前のセミナーの時に言ったことだが、「これは私が考える見守る保育ではありません。うちの職員が見守っていたら、その映像では子どもたちが解決するからと言っていたが、うちの職員だったら、あの子たちだったら解決する」と言う。1時間も解決しない子だったら、仲裁を派遣するなり、違う手立てを持つ。この子たちだったらできると思ったから待つ。そのためには、よく発達を見ていないといけな。その広島大学の先生が小学校の先生に別の映像を見せたそう。キャンプで火をつけなさいと試行錯誤して1時間したが火がつかなかった映像を見せた。「つかなかった1時間をどう思いますか？」と聞いたら、小学校の先生は「おかしい」と言っていた。我々のやろうとしている保育を理解している養成校の先生がそうではないと手をあげて発言しようかと思ったと言っていた。黙って1時間待つのではなく、火を付けられる子を派遣したり、付けられるよう、子ども同士が協力できるようにする。火を付けてと子どもが先生のところへいいに来るようにする。子どもが試行錯誤する前にするのはおかしいが、手を出してはいけないと言っているつもりはない。子どもたちが言って来たら、やってあげる。子どもと遊ぶことも口を出すこともある。大人が先回って子どもたちの気持ちを察して、先にやることはしない。子どもが言ってからとか、どのくらい力があるかで介入する。この辺りはなかなか難しい。

指針が改定され実施されるが、これをどう保育として生かしていくかは難しい。解説する研修会がこれからあるが、それを聞いても現場でどうするかは分からない。その一つの解釈をしたのが私の考え。そう思っで見守る保育や部屋にゾーンを作ったりすることを20年前から提案してきた。そうしたら説明するのにいい資料が最近見つかった。それは世田谷区の質のガイドラインという本。世田谷区は色々な園が数多く毎年開園している。そのために、園長たちは研修をしている。世田谷区は「世田谷区では、こういう保育がいい保育です」と冊子を作って保護者に配った。その保護者に配った中で「こういう保育をしています」ということでやらざるを得ない。いくつか解説しないといけないが、私の考えている保育とそっくり。私が作ったのではないかと言われたが、そうではない。この本を解説しながら今日は私たちがどんな保育をしているのか、だんだんスタンダード化してきたこととお見せしようと思う。ここに世田谷区における保育、質のガイドラインがある。マンガと文章の作りで内容はある保護者が園に見学に行き、保育者が園の説明をしているものを抜き出してきた。(※1なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～世田谷区の保育の質ガイドライン)

## 一人間として育てる“底力”を育む



引用元：なるほど！せたがやのほいく  
～遊びと学びがいっぱい～  
世田谷区の保育の質ガイドライン

まず、「底力を育てていきます」とあります。両親が見に来て子どもが遊んでいるところ。この保護者は、「保育園はただ遊んでいるだけなのね」と言います。保育者は「違うのに！」と思っている。「園長先生、バケツ合った、水を入れよう！」となる。そうすると、走っていて、水を汲みに行っている。「すごいパワーでしょ」と説明している。「興味を持つ力、探求する力、人と協調する力、最後までやり抜く力、これらは人が生きていくのに必要な底力」と説明している。これが乳幼児期に育つ非認知能力と言われている。この時期に、身に付けるべきものを列挙している。興味を持つ力、探求心は新しい指針に表れている。最近大事にされている最後までやり抜く力。失敗しても、めげずにやる力は大事。子どもた



引用元：前出と同じ

『人間として育てる“底力”を育てていきます』p10

ちに知識を教えることでもない。黙って過ごすだけではなく、子どもたちが興味を持つ力、最後までやり抜く力がとても大事なもの。なぜ大事かを園長はこう説明する。「これが育っていないと学校の勉強も仕事もうまくいかないの。園は、そういう力を育てているんですよ」小学校の学力をつけるために足し算を教えているわけではない。ずっと、まさに私たちが目指してきたこと。認知能力ではなくて非認知能力だと。遊びの中にこれらが詰まっている。じっと座って、黒板に書いて覚えさせることではない。子どもたちは一日の最も活動的な時間を保育園で過ごす。その中で集中して遊んだり、仲間と過ごす毎日を全力で過ごすことで心と体に人生を生き抜いていくべき底力がついてくる。駆け回ったり、毎日過ごすことでこれからの人生の力になる。根っこという言い方や基礎という言い方もするが、これらが育つのが園。こうした成長を支えるために保育士は子どもたちの遊びを見守りながら、絵本などを必要な時に子どもの手に届くように用意しておく。そうして自ら遊び込めるような、時間を保障する。そして空間を整える。私たちはゾーンという言い方をするが、保育室内ではままごと、お絵かき、造形などのコーナーが設けられたり、園庭では存分に遊びこめるように菜園などの環境も整えられている。子どもの「何でだろう？」という気持ちを大切に、育む場が保育園と言われている。子どもたちの遊びを見守りながら、発達にあったものを用意する。子どもたちが必要な時に取り出せるところに置く。自分からできるような時間や場所を用意していくのが保育士。そのためにいろいろなコーナーを作る。園庭は、存分に外遊びができるように、砂場や植栽はまさにフレーベルがキンダーガーデンを作った考え方。日本では幼稚園はお茶代付属学校のプレスクールとして作られ、始まった。学校と同じような園舎づくりをしたのが日本。そこに野口幽香さんたちが、貧しい地域を通ったらただ長屋にいて、この子たちも小さいうちに面倒を見るために必要なのが保育園だろうと救済措置として作られた。キンダーガーデン幼稚園が発祥したドイツでは、子どもの園（その）を作ろうと親戚の子を集め、最初から異年齢。学校というイメージがなかった。庭は菜園を作って、起伏がある園庭を作った。校庭というイメージはない。これが本来の園庭で、世田谷では質の高い保育とすることで、園庭は植栽や砂場、菜園があるということを条件として、その中で子どもたちが何だろう、「もっと！」というやる気、好奇心、探究心へ行くという言い方をしている。これはまさに私たちがずっと目指している保育が書かれ、スタンダードになってきている。同時に仲間と共に育っていく場です。これが家庭と違うところです。一人ではできないこともみんなのできるということは育ちの中では大事なことです。ここでもまた必要な十分な声掛けをして子どもたち同士助け合いながら目立たない形で支える。これが見守っているということ。先ほどの遊びも見守ってと書かれ、ここでもそう書かれている。子ども同士の関係なので子ども同士を結び付ける工夫を陰で行っている。時にトラブルはあっても友達同士育ちあってく実体験が、さらに大きくなって社会に出た後になり立っている底力になると書かれている。これは自立という言葉は「自分が立つ」という。世界で我が子をどんな子にしたいかを聞くと、日本では優しい子、思いやりのある子と答える人が

多いが、ヨーロッパでは自立をした子という。自立は何で必要かという、一人で生きていくというためでもあるのだが、指針の人間関係の中で自立について書かれている。それは、人は支え合って生きていくために自立が必要と書かれている。これを保育園で学んでいるということは家庭では学べなくなってきた。一人でできなくても、力を合わせればいいということだが、今日の見学者の質問でも思ったことだが、中国から見学者が来た時に、「えっ!？」と答えられない意表を突く質問をされた。

### —見学者からの質問—

0歳児が自分で自分の服を仕舞うようになった。食べ終わった後、片付けるのも1歳を見て真似して自分でやろうとしている。これは学ぶことは真似るから来ている。そして学習している。少し上の発達を見ないといけないので、手づかみで食べる子は、スプーンやフォークを使っている子とを見るとか、こぼさない子を見るとか、これが異年齢保育の一つですよ。と伝えたら、「フォークを使っている子が手づかみ食べを真似することはしないんですか？」と聞かれたので、「悪い方を真似していたら人類は進化しない」と伝えた。赤ちゃんには赤ちゃん返りということがあるが、愛情に歓喜されることはあるがそうではなく、悪いことを真似するんだと意表を突いてきた。その上、3.4.5歳のことでびっくりした質問を受けた。ブロックをみんなで作っている。見学に来た日が月曜日で、金曜日には全部片すことになっている。なので、月曜日だと雑然していて、「協力して大きな作品を作り、協力することを学ぶ」という話をしたら、「凄い作品を作っている子に嫉妬しませんか？」と聞かれた。「中国では嫉妬して壊す」と言われた。えっ!？と思った。うちの園ではそういうことはなく、憧れて作ったりする。今、綺麗なコマが流行っているので飾ると自分もこうしようとか、塗り絵も自分もこういう絵を描きたいなと憧れることがあるが、嫉妬するなんて考えたこともなかった。中国には一人っ子政策があり、0.1歳の時にちやほやされ、4.5歳になると自分が一番になりたがるということを中国の方もまずいと思っている。「そうでない子にしたい、それには何年かかりますか？」と聞かれ、一人っ子政策でひずみが出ている。自分勝手にしてしまうことがあり、乳児の頃の丁寧な関わりがそういう子たちを生んでいる。今二人っ子政策にしているが、なかなか産まないと困っている。そういうことが4.5歳で日本でも起き始めている。見学者から、「邪魔をする、走り回る、人のを壊す」と質問を受けたときに中国っぽくなってきたとか、テンションをあげて騒いだりすることも中国や韓国っぽいと思っていた。日本の少子化は0.1歳を丁寧にし過ぎているのではと思う。

昨日まで長崎で研修会をしていたが京大の山極さんが、BSで話していた内容を話したが、サル化していると言っていた。人間は家族を作り家族が集まり社会を作る。家族と社会が両立しているのは人間だけ。どうしてかということ、家族は無償の愛。その人のためにやることで報奨を求めない。社会は何かをしたら返す、そうすると矛盾するものがある。これを埋めるのは人間しかできず、これは共感する力と言っていた。人間だけが共感する力と言われているが、だんだん共感する力がなくなってきたという。山際さんは共感力は体や脳、人間はそれをするためには表情や視線を見ていた。何故かということ人間は白目がある、白目が視線を感じる事ができた。言葉や文字は最近だと言われ、それまでは、視線で共感をしていたのに、白目が見える距離で人は話していないと言っていた。赤ちゃんも言葉が話せない子には白目が見えると距離で話さないといけない。知識は伝達できるが共感力は白目が見える距離で見て話さないといけない。人類はこれができたから社会と家族が両立出来たと言っていた。これは、保育の参考になる。人間は二足歩行するために産道が小さくなり、赤ちゃんが小さく生まれる。出産期が短く、赤ちゃんは足が遅く捕まる可能性がある。そのために一つの方法はイノシシのようにいっぱい産む。またはシカのように毎年産む。霊長類は1回の出産で1人しか産まないの毎

年産む方を選んだ。毎年産むにはお母さんに生理を起こさせないといけない。そのためには離乳して抱っこから床に降ろさないと妊娠できない。次の年に子どもを産むために8か月で下に降ろして、次の出産の準備をしてきたが8か月になっても抱っこしていたら準備ができない。そして共同保育をして社会を学んできたと言っていた。少子化になっていつまでも抱っこをするし、保育園ではずっと抱っこしてしまうと社会を学ぶ脳が育たない。4.5歳になると勝手に自分だけという症状になってしまっているとされている。中国はそれでえらい目にあっているが、どうも日本もそうになっているのは共同保育をしなくなってきたからではと言われてきている。質問をされることで分かって来た。人と人との関係で育っていくが、離乳後の赤ちゃんからはじまる時に、先生は赤ちゃんに一人ひとり対応するのではなくて、遠藤先生が愛着形成で言っている「後ろでどんと構え赤ちゃんが一人遊びしている時は介入しない。ただし、まき込みたいときは積極的に関わる。」これが見て守る=見守る。子どもが求めているのに、知らん顔しては見守るとは言わない。見守るのは手を出さないことではない。これが質の高い保育の応答性と言われているもの。

昔は白紙説でいろいろな刺激を与えていたが、今は生まれて育っていてそれを上手に刈り込んでいかないといけない。どうも4.5歳に最近増えてきている。特定の人を一人の人と知っているようで、食事させることが流行っているが人類からするとおかしい。共同保育をしてきたのが保育ですし、赤ちゃんは1人だとリスクが高い。複数というのが特定の人のことで一人のことではない。子どもは優先順位を決める。子どもは優先順位を決めるという確信を思ったことがあった。赤ちゃんで男性がダメな子がいた。必ず女性の先生のところへ行く。ある時問題が起こった。その日は父親保育で、父親保育は男性だけで保育をするので男性しかいない。自分のお父さんには泣かないので、お父さんのようにロン毛でひげがあるので真似したがずっと泣いていた。その時、ふっと見つけて泣き止んだのは普段泣いているうちの男性保育士だった。普段は優先順位が低く泣いていたが、父親保育では優先順位が一番になり、そこへ行って安心していた。その時よっての順位がある。これが一人だけしか相手をしていなかったらかえって不安定になる。いろいろな人が関わった方がいいと思っている。まさか道に歩いている人に抱っこさせるわけではない。赤ちゃんは生きるために特定の人を複数持つ。いろいろな食べさせ方、おもむつの替え方を知ることが大事。これは家ではできない。家ではなるべくお父さんやお爺さんも変えましょうという。普段やらないから泣くが、お父さんにもやらせるべきだし、ごはんも食べさせ、色々な人と接することが大事と言われている。特に大事なのが、子ども同士。なので、子どもを相手にするのではなく、子どもが生き生きできるように先生は接する。もし、一緒にやろうと言われたらもちろんやる。

## —自発性を育てる工夫—



引用元：前出と同じ

『自発性を育てる工夫をしています』

p18

2つ目には自発性ということで、保護者が年長を見た。「くじら組5歳児ですね？」先生が「活動は子どもが『自発的』にできることがポイントなんです。」先生は子どもたちが自発的にできるよう意図をする。「この組は先日の遠足を機に町づくりが流行っています。」町を知ったので街づくりが流行っている。子ども達が町づくりをしたいと思ったときに、透明のカップ、ラップの芯など多様な素材を用意いつでも出せるようにしておくことが環境の用意。必要そうな素材を用意し先生が極力口を出さない。極力というのは活動が停滞した時だけ。この木、倒れちゃうという時には、粘土使ってみたら？という提案をすることは必要。自分から遊びたいと思える活動を作る。そのためには空から見た町として、子どもたちが遠足で町に興味を持ったなら、それに関する本とかを置いておく。本を置くことで親は「だか



引用元：前出と同じ

『自発性を育てる工夫をしています』

p18

ら湖の周りに家を作ろうとしたのは、この本に刺激されて？」とある。本も何種類かあって物語のようにゴロゴロして読んだり、図鑑のように観察ゾーンでは科学の本を置くなど、何かをするために置くことも必要。これはもう少し先だがこれはPCになると思う。小学校ではPC教室といって、使い方を教えていたが、ドイツでは何か困ったときに調べるようにしている。本はひとつの道具でもあるので、子どもたちに刺激するように置く。ここでの保育はよく言われるプロジェクト保育と言われている。今日はこういうものを作りましょう、というのはプロジェクト保育ではない。それには本や素材があったり、ヒントを出したりする関わりが必要。その基本は、子どもが自発的にやろうとしないといけない。目からうるこだったのが、ドイツからベルガーさんに来てもらった。最近ドイツでは、オープン保育が流行っている。自分の部屋でお集りをするが、それ以外はどこへ行ってもいいと流行っている。私が質問したのが、「先生は、子どもを把握できませんか、親も自分の子をどこへ迎えに行けばいいのか分からないのでは？」と聞いたら、「実は、ドイツでも、保育者はそういう心配をして反対をした。この保育では子どもを管理できない。保護者も分からないと反対をした。その後、話し合いをした結果、全て大人の都合だということが分かった。子どもにどうかと聞いたら生き生き楽しそうだったので、子どもの方を重点的に考え実施することになった」と言っていた。子どもにとっての反対理由ならいいが、全て大人の理由だったので何とかしようと居場所に印をつけるとか、色々工夫している。子どもを優先していると聞いた時に、日本では大人主導なところがある。子どもが生き生きしている事が大事。日本ではきよろきよろするのは、落ち着きがないというが、赤ちゃんはあっちを見たりこっちを見たりする。これを安心してできることが大事で、危険なものを置いてはいけない、置いていけないものがあつたらダメそっちへ行っちゃ！と言うしかない。その辺が難しいところだが、今日もそうだが探索活動が盛んになるので、どうしても出たくなる子がいるのでどこへ行ってもいい。そこでの先生が見ている。これが担当だったら3人のうちだれが行くのかなと思う。うちはチーム保育をしているので、一人の子が先生が布団を敷くのに興味を持っていた。先生の邪魔をしていたが、家庭みたいだなと思った。なんにでも興味を持つ。子どもは色々なものを玩具にする。それが見立て遊びにつながる。それが将来の想像力につながる。今の子どもたちは物が豊富になったことで、ブロックを電車にしているから買ってあげようとか、本物に近いものを用意してしまう。1歳児は見立てることが大事。見立てるといのは本来のものではないものを見立てること。見立てをすると本物がほしくなるのが2歳。保育者には難しいと思うがある研修で事例を出された。子どもたちが園庭で帽子を投げて遊んでいたらフェンスの向こう側に行ってしまった。取れないので、虫捕り網で帽子を取ったら、先生が「帽子は何をするもの？」と聞いたら、子どもは「帽子は被るもの」「虫捕り網は虫を取るものでしょ」と先生が答えていた。投げるのはボールでしょと先生が手渡していた。その時に「藤森先生はこれについてどう思いますか？」と意見を求められた。ちょうどその頃、私は春の高校甲子園が決まった映像を観ていた。みんな帽



子を上に投げている。高校生に「帽子は何をするもの？」と聞くつもりと言った？必ずしもそうではない面白さがある。帽子を投げることにへらへらする面白さは知っても、見立てて遊ぶことは本来とは違う使い方をする。それを許す気持ちがあってもいいと思う。これは福岡のあるところで、研修会をした時のことだが、きちんとしていて、それはそれでいいのだが、その時に私の好きな歌が小学校1年生の教科書の扉に書いてあったのを思い出した。私の歌の好きな歌の一つに『おさるが舟をかきました』（まと・みちお作詞/團伊玖磨作曲）というものがある。「舟でも／かいてみましょうと／おさるが／舟を／かきました／けむりを／もこもこ／はかそうと／えんとつ／一本立てました／なんだか／すこしさみしいと／しっぽも一本つけました／ほんとに／上手にかけたなと／さかだち／いっかい／やりました」という歌がある。さるの気持ちがかわいいと思う。自分の中でよくできたと思いきや。舟にはしっぽはないからと怒る。でも、いいじゃんと思はれる。

昨日、長崎で研修をした時の事例で1歳児がコップをおやつの後にした。ある子が多分、先生に片してもらったら自分に自分で鏡を指して手をたたいて褒めていた。それが心地いいのか、もう一回やっていた。そんなところで遊んじゃダメではなく、子どもにはきつと意味があるのだと思う。面と向かっていいというつもりはないが、むきになって怒ることもないと思う。子どもは何でも興味を持ち、保育士の仕事でもある。次はこれ、その次はこれと束ねるように率先指導していく保育は、子どもは言うことを聞く姿勢になってしまう。

私の妻は保育士ではないが東京都の教育モニターで幼稚園へ行った。折り紙をしていた時に、折る手順をやっていた先生が「2つに織りますよと笛を吹いて、全員が同じように折っていたのを見たときに、これが教育か」と思ったと言っていた。絵画指導をしている時の話を聞いた幼稚園で「母の日なのでお母さんの顔を書きましょう」となり、点線がありそれをなぞっていた。「細いお母さんも太っているお母さんもいるのに」と思った。いい絵を描かせるためかもしれないが、そういう絵を描かせるものではない。束ねるようではなく、これは何だろうと興味を持たせることが保育士。その活動の様子を見取りながら、子どもたちが垣間見る、これ面白そう！という気配を察知すること。言葉を理解するのではなく気配を察知する。興味関心をさらに深め、広げていくために保育士はポケットが豊かになるためにしている。折り紙の折り方は前の日に覚えていけばいい。子どもが興味を持って、面白そう！とするためには、保育士は色々なことを知らないといけない。造形素材、抱いた疑問を自ら調べられるような図鑑を用意する。本は必ずしも読むだけではない。

## 一日々、保育者としての専門性を磨く



引用元：前出と同じ

『日々、保育者としての専門性を磨いています』p28

それと同時に「思いがけない質問に保育士は日々学びをしていきます」というところは、私が思っているのとはちょっと違う。「思いがけない質問には一緒に考えること」が大事だと思っている。答えるのではなく共に考えを深めることが大事。ともに深めていくことをさせることが大事で、答えを教えることではないと思っている。中には、もともと友達同士で遊ぶことが苦手な子もいるでしょう、一人で過ごしたいこともあるでしょう。その時々の様子を見取り、必要な援助をすることで子どもたち自身の自由な発想から生まれ、保育が展開される。必ずしも元気で遊ぶだけが子どもではない。ゴロゴロしたり、ボーとしたこともある。園庭がそう。元気に走り回るためだけの園庭だけではいけない。外気でボーとしたり、虫を見つけたりすることが大事。どうしても日本は友達同士で仲良く遊ぶことが目的にある。賛否両論あるが「友達百人できるかな」という歌があるが100人



できない子はめげてしまう。子ども一人ひとりを大事にしてあげましょうということ。やらせてたら子ども一人ひとりを把握できない。保育士の専門性がここに書かれている。避難訓練があったようで先生たちはバーと逃げた。突然の訓練にびっくりしたが先生のチームプレーもびっくりした。プールをしている時にお互いを連携している。とっさの判断でお互いの役割をしている。私の園の見学へ来た方に説明したが、同じチームでもサッカー型のチームワークを説明した。多くは野球型のチームで技術を高めることが練習になっている。サッカー型はおおむねの役割は決まっているが、ボールに固まることはない。部屋の中で基本的に均等に先生がいる。マンガを見ると「それは保育士の専門性ですよ。園は集団生活の場だから、連携は欠かせないんです」と言っている。子どもが取り合っって喧嘩と言っている先生もいれば、「ゴミ出しします」という先生もいる。これとそっくりなのが次のシーン。大昔も「ゴミステル」と言っている。大昔から集団の中で育ってきたと言っている。先生は「だから集団生活は、子どもにとって自然な状態なんです。それが園の強み。そして、保育園はただの集団じゃない。専門知識をもった保育士のいる集団なんです」。「コラーケンカやめる」では専門性ではない。専門性がある人は介入する、見守ると考えている人。こういう保育をすると悩むところで、どこまで見守っていいかと聞かれるが、どこから、どうかではなくて、悩むことが専門性。発達段階や状況、子どもの関係性から介入するかを考えることが専門性。ただ「止める！」ではなく、発達状況からどこから介入するかを考えることが専門性であると私が言いたいこと。どこまで見て介入すればいいかということ聞かれるが、そこは試行錯誤するしかない。早く入ってしまったら早く介入しすぎたなと思う。朝会でいつも怪我とかの報告をするが2歳児のけがが続いた。「夏を過ぎたばかりなので少し発達が戻っています。夏までの介入より、早く介入した方がいいのではないかと。5月くらいの介入をした方がいいのではないかと子どもの様子を見て、介入を考えているベテランが助言をしていた。ここまで育ってきたと先生は思うかもしれないが、家の中で休み戻って来た時に発達も戻り、早めにした方がいいと言っていた。マンガでは見学の説明している前で「ケンカするな～」と言っているが、中にはいいかと思うことがある。親はこういう一瞬を見て怒ったりする。本当はその前後があるのだと思う。これが世田谷区のスタンダードの保育の質の高いものとして配られている。困る園も多いのではないかと。コーナーがなくて先生がやらせていたら、どうするんだろうと思ってたら、そういう園は配らないそう。ネットでダウンロードできるので、次第にこういう保育になっていくのだろう。私たちが目指そうとしている保育は、見守るやどこまで介入するかということはスタンダード化してきた。質が高い保育として言われてきた。こういう保育にゆくゆくになっていく。反対する人もいるが、子どものことを考えていくと、こういう保育になっていくと思っている。その部分をぜひ自信をもってやってほしい。必ずしも正しい方法だけでなく、試行錯誤し話し合ったり、振り返りいい保育を目指していくもので、最初からいいものができるわけではない。今日

引用元：前出と同じ

『日々、保育者としての専門性を磨いています』p28

はここだけだがドイツでこういう保育をしていますと配られている。長崎へ行ったら長崎のメンバーで最後は500人位集まった。GTのガイドラインを作ろうと言っていた。全国のそういう園に配る。こういう保育を目指そう。自由にさせているわけではない、そこからどんな力をつけさせようとしているかを保護者に知ってもらおうとする必要もある。数が数えられるようになった、英語を話せるようになったということだけでなく、見えないものをどう見えるようにするかということも大事。世田谷では冊子を配ったりしている。HPでダウンロードしてみてください。私たちが進めようとしていることがスタンダード化してきている。決して人気が出るために行っているのではなく、スタンダード化に順にしていってほしい。質を上げることで私たちの処遇も上がっていく。ぜひ発信をしていってください。こういう保育をしていると保護者にも発信して広がっていくといい。最初のセミナーで全体的な話をしたが、どういう発信の仕方があるかはこの後事例を見たり、今回のセミナーに参加して伝えたいと思うことを理解してくれたらと思う。これで終わります。ありがとうございました。

本稿は、2017年9月4日に行われた第45回保育環境セミナーの基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)

## 参考サイト

1. [なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～ 世田谷区の保育の質ガイドライン](#)  
発行 世田谷区 子ども・若者部保育課